

特別寄稿

いのちと響き合う言葉

ノンフィクション作家 やなぎだ くにお 柳田 邦男

ドクドクドクと音が聞こえるようないのちの鼓動を伝える言葉は、どこから生まれてくるのか。そして、そういう言葉を誰かの心に共振を起こす形で伝えるには、どのような条件あるいは状況が必要なのか。先頃、がんが進行して末期になった神奈川県茅ヶ崎市の小学校校長の大瀬先生が、月に二、二度、中学年、高学年のクラスに順に出ていって、いのちについての特別授業をしていることが、新聞やテレビで紹介された。

「やせ衰えていく自分の姿を見せることで、いのちの重みを伝えたい」という思いから、子どもたちに点滴の器具などを見せながら、自分の病気について語り、いのちをテーマにした絵本をゆっくりと読み聞かせる。そして、子どもたちが学校で飼っているヤギやカマキリのことを話題に取り上げ、「ヤギもカマキリもいつか死ぬけれど、赤ちゃんが生きている。いのちはどうなってるのだろう」と言って、子どもたちに発言を求めると、答えが返ってくる。

「いのちがリレーされてる」

「いのちはずながつてる」

大瀬先生は、子どもの机の前にしゃがみこみ、目線を同じ高さにして、しっかりと子どもの目を見つめて、語りかける。その子もまわりの子も、先生をしつかり見つめ、耳を傾けて、考えている。いたずらに深刻がるのではない。真摯に子どもたちと向きあい、全身で会話をしようとしている。魂の会話と言ってもよいかもしれない。だから、子どもたちも真剣に耳を傾ける。

いのちについて、子どもたちに教えるのは難しい。少年による凶悪事件が多発していることもあって、いのちの大切さを教えることの重要性が叫ばれているが、子どもたちがいのちというものを、単なる知識としてでなく、実感としてわかるといふ領域に踏みこむには、どんな言葉あるいは語りかけを用意すればよいのか。それはとても難しい問題だ。

大瀬先生の場合は、通常の食事をとることができないため、毎日、自宅で十二時間の点滴によって栄養の補給を受けなければならない。そういう身で登校して、子どもたちの前に立つがゆえに、一つ一つ

柳田邦男(やなぎだくにお)

1936年栃木県生まれ。NHK社会部記者を経て、ノンフィクション作家になる。1972年に『マッハの恐怖』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。現代人の「いのちの危機」をテーマに執筆活動が続けている。主な著書に『ガン回廊の朝』(講談社ノンフィクション賞受賞)、『零式戦闘機』、『脳治療革命の朝』(文藝春秋)、『20世紀は人間を幸福にしたか』(講談社)、『言葉の力、生きる力』、『元気が出る患者学』(新潮社)、『絵本の力』(岩波書店)など。

の言葉にまさにいのちのかかった内実と重みがこめられる。その姿と声をとおして、大瀬先生が語ろうとしていることが、子どもたちの心にずんずんと浸みこんでいくのだと思う。体当たりの授業は貴重だ。では、重い病気を背負うとか何らかの危機に直面している教師でないと、いのちの授業はできないなど言ってしまったのでは、教育が成り立たなくなる。どうすればよいのか。

数年前のことになるが、地方のある高校の二年生になる女子高生からいただいた手紙を紹介したい。S子さんと呼ぶことにする。

S子さんは、がんのために限られた月日生き抜いた人々やそういう人々を支える医療の取り組みについて、多くの本を読み、死について理解できたと思っていた。ところが、友達の一部が急死したことを聞いたとき、その死をどう受けとめていいのかわからなくなった。そこで、幼い頃のひいおばあちゃんの死のことなどを思い返したところ、死とはその人と絶対会うことができなくなることだと考えるだけで、それ以上深く考えるのを回避していた自分に気づいた。

一週間ほど経った日、S子さんは亡き友達の家を訪ね、仏壇にお線香を上げた。友達のお母さんがとめどなく涙を流す傍らで、S子さんも友達の死が現実のものとなって迫ってきて、涙がとまらなくなってきたという。

このような経過の中で、S子さんはこう気づいたという。自分は今まで死を客観的にしか見ていなかったけれど、主観的な見方を加えると、死とは、その人のことを忘れるのでなく、心の中でその人と一緒に生きていくことなのだ——と。

このS子さんの気づきはすばらしい。死を対象化して客観的に知識レベルでわかった気になることと自分の生き方や他者との関係性にかかわる問題として身近な人の死を実感レベルで受けとめることの、根本的な違いに気づいたのだ。十七歳の女子高生ならではのみずみずしい感性が、それを可能にしたと言えるようか。

しかし、その感性の背景には、S子さんが「生と死」に関する多くの本を読んでいたという蓄積が

あったということも大事なことだ。読書は、さまざまな人々の生き方や死の迎え方を知る機会になる。それは、とりあえずの情報や知識として読む者のメモリーに取りこまれ、うっかりするといのちや死についてわかった気にさせてしまうものでもあるのだけれど、そういう読書の蓄積は、いざという時の現実に対する本質の理解を受けける役割を果たしてくれるものだ。応用問題を解く能力を高める役割と言ったこともできる。

そこで再び、いのちの教育の問題に戻ろう。

教師の多くは、いのちの危機を実感するような体験をしていないに違いない。そういう教師が子どもたちの心を揺り動かすようないのちの授業をするには、どうすればよいのか。取っかかりとすべきものとして、私は二つのことを提案したい。

一つは、子どもたちが関心を向けやすい身近な家族の病気や交通事故による負傷や死を、実際に経験した子を中心にみんなで一緒に考えるという取り組み。時には、ペットの死でもよい。誰かクラスの中に一人でも、家族にそういう事態が生じているのがわかれば、その子を中心にいのちについて語り合う機会を逃すべきではなからう。それは、いのちの問題を考える有効な取っかかりになると同時に、子どもたちに、他者の心の痛みや悲しみに対する共感や同情の感情を育てる機会になる。

もう一つは、教師が戦争、災害、公害、病気などの体験記や遺稿集を日頃から読み、心を耕しておく必要があるということ。私はノンフィクション作家として、そういう体験記類の数々を読んできた。そして感じているのは、戦争、災害、公害、病気などの体験記類には、文学作品とは違った意味で、いのちの危機に直面した人ならではの、いのちの鼓動を伝える言葉が登場しているということだ。ほんとうの言葉が生まれ出る場とは、まさにそういう限界状況のところだと言おうか。そのような言葉に慣れ親しんでおくということは、クラスの子どもの誰かが自分か家族か友人に何らかの具体的な命の危機にかかわる事態が生じたという体験をした時に、教師が真正面からその子と向き合う姿勢を醸成することにつながるに違いないと、私は確信している。